Sea Side Jet City

ギヤブルース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｅａ　Ｓｉｄｅ　Ｊｅｔ　Ｃｉｔｙ

【Ｎコード】
Ｎ８８０８Ｘ

【作者名】
ギヤブルース

【あらすじ】
イジメられっ子から不良へ、そして最終的には極道にまで身を堕とすはめとなった男の哀れなお話。
歪んだ青春の幕開けから、なぜそこにたどり着いてしまったのか、ある意味奇跡的な馬鹿の青春物語です。

プロローグ

夢にみた街　どこにあるのか　たどり着きたい　誰か教えて

俺が住んでた街は、小さな港町のすぐ隣。電車はＪＲだけど、ディーゼルエンジンの黒い煙を吐く2両編成しか通ってない。
まぁ、早く言ってしまえば、「田舎に泊まろう」に出てくる様な場所に毛の生えたような所。
ただ、他所とちょっと違うのは、頭のおかしい奴が多い所ぐらいだ。
ちなみに、どのぐらいおかしいかって言うと、「他人の物は俺の物。俺の物は俺の物」って言う、ジャイアニズムを、人間的に「それ、ナシじゃね？」って思う奴がまずいない。
それどころか、「俺も、俺も」と言い出して、一緒に悪乗りし始める奴までいる始末。
我ながら最低の環境だと思う。
小さな港町は昼間は漁から帰ってきた漁師が一升瓶片手にクダまいて道路の真ん中で昼寝しちゃうぐらい平和だけど、夜になると、近隣、はたまた他県から若い奴らが集まり、夜な夜なナンパや喧嘩、時には強姦とか外人が薬を売ってたりする、ちょっと危ない街に豹変する。
これから話す話は、まだ俺が１０代だった頃の８割実話で2割嘘ぐらいの俺と楽しい仲間の青春の傷跡だ。
まぁ、適当に暇潰しぐらいで聞いてくれると嬉しかったりする。

小学校の頃、俺はイジメられてた。
理由は今でもいまいちわからないけど、小学生なんて、学校の便所でウンコしただけでもイジメがはじまるような残酷な生き物。（だからって別に学校でウンコした訳じゃないよ）きっと、理由なんて些細な事だろ。

毎朝起きてまず思う事は「学校行きたくない」だった。
俺の名前が牧野大吾だった事がまずマズかった。
あだ名は「巻き糞大便」に早々に決定した。
今なら某、ダンスグループ（人数が増え続けてるあのグループ）のメンバーみたいに「マ〇ダイ」なのに。
鬱だ死のう。
そしてそのタチの悪いあだ名からエスカレートし、悪口、無視、挙句は殴る蹴る。
小学生のガラスのハートにはちょっと堪えた。
「死にたい」って思うまでになるまでわりと時間はかからなかった気がする。
だけどそんな地獄みたいな日々に転機が訪れた。
違うクラスだった拓ちゃんって奴に助けられたんだ。
拓ちゃんの兄ちゃんは絵に描いたような不良で、「特攻の拓」って漫画の緋咲さんって奴にソックリだった。
拓ちゃんの兄ちゃんは悟君って言って、俺達にタバコの吸い方と喧嘩の仕方を教えてくれた。
おかげで次の日から俺達に逆らう奴はいなくなったんだ。
調子に乗った俺達のグループは、同じ学校に喧嘩する相手がいなくなったもんだから、違う小学校にちょっかい出し始めた。
でも小学生って不思議なもんで、他の学校の悪い奴って同じはみ出しモン同士、なんかちょっと友達になりたかったりする。
やはりそれは相手も同じで、喧嘩売りに行ったはずがいつの間にか友達になってた。
　そこからは人数も増えたし、喧嘩相手を求めに、隣町までチャリで行ったり、拓ちゃんちでどこをせめるか会議（笑）したり、いろいろ楽しかった。
そして、そのまま中学にあがっていく。
　中学校ではすでに悟君は卒業していたが、やはり彼のネームバリューはすごく、２コ上の先輩は俺達を可愛がってくれた。

田舎だったから、学ランなんかも長いヤツや短いの着たり、髪型も中学生のくせにアイパー（売れない演歌歌手みたいな髪型）かけたりパンチパーマ（湘〇乃風の〇旦那みたいな髪型な）かけたり、とにかくやりたい放題で、かなりの時代錯誤っぷりを発揮してた。
そして、そのやりたい放題っぷりが気に入らなかったのか、１コ上の先輩達はおもしろくなかったらしい。
２コ上の先輩達が卒業したとたんに、仲間の一人がボコボコにされて全裸で公園の池に放り込まれた。
そいつのおかげで、俺達は先輩達を下向かせるための大義名分を手に入れた。
元々、喧嘩好きな奴多かったし、なにより悟君の影響（悪影響）で俺達の学年は不良が多かったんだ。
一ヶ月後には先輩達は俺達に敬語使ってたよ。
中二の頃には、悟君が入ってた族（暴走族）の集まりに出入りしてた。
友達が拝借してきた単車を、原型なくなるまで改造してそれに乗って族の集会に参加していい気になってた。
童貞捨てたのもこの頃。ビッチな先輩を呼んで飲み会開いて、酒の力をかりて一気に５人がその日童貞を捨てた。
中学生の時はいろいろ揉め事はあったけど、結構みんな仲良くやってた。
隣町の中学校に殴り込みに行って帰りパトカーで送って行ってもらったのはいい思い出だ。

はじめての失敗

中三の頃、事件が起きた。
その頃、友達の将之の家が溜り場になっててた。
将之ってのは、底なしの馬鹿で、いつも必ず最後に何かやらかす「トラブル製造機」的な奴だった。
１コ上の先輩達に袋叩きにされて全裸で池に放り込まれたのはコイツ。
今まで生きてきた中で、靴下で局部を隠した人間をコイツ以外に俺は知らない。
その日もいつもの様にくだらない話したり、結構夜中まで遊んでた。
かなりの勢いで雨が降ってた夜で、将之が「車で送ってく」と言い出した。
その前から、親の車とか乗って遊んでた俺達は、軽い気持ちで送ってくれって言っちまったんだ。
将之は車の運転はうまかったが頭がとにかく弱かった。
俺と拓ちゃんとあと海って奴の三人を送ってく事になった。
この海って奴はかなり調子のいい奴で、ドラえもんで言うスネオみたいなポジション。
で、最初に拓ちゃんを下ろして、次に俺、最後に海を送ってく順番だったが、拓ちゃんを降ろしてからしばらくすると、海が「俺も運転したい。」と言い出した。
将之んちの車なんだからやめとけって言ったが海は聞かずに、将之と運転を交換した。
外は雨。時間は４時頃。
海は簡単だと言ってどんどんスピードあげてく。
そしてなぜか車が右車線を走りだした。
「ここはアメリカ？」って勘違いしたのか、それともただ調子にのって逆走したのかはいまだに分からないけど、とりあえず気付いた

時には前から光が見えてた。
「ヤバい」って思った時には既に時遅し。
海は前から来た車と正面衝突した。
俺は外に投げ出され、将之はフロントガラスに顔から突っ込んでた。
海は逃げた。
相手は無傷だったみたいだが車はボンネットがくの字に曲がり、意識が遠のく中で「将之連れて逃げなきゃ」と思ったけど体は動かなかった。
俺達はそのまま病院に搬送され、翌日逮捕された。
翌日の目覚めは実に最悪だった。
体はボロボロだし、頭は縫うためにボウズにされてるし。
脇には見たこともないおっさん座ってるし。
親より先におっさんが口を開いた。
「１０時２４分、道路交通法違反の疑いで逮捕。」
後で聞いたら、将之の方が俺より先に起きて連れて行かれたらしい。
誰が運転してたとか、なんで反対車線走ってたんだとか、とにかく責められまくった。
だが、話を聞いてると、海の名前が全然でてこない。
不思議に思った俺は取り調べしてた警察官に聞いてみた。
将之は何か言ってたかって。
すると警察官は、
「アイツは自分が運転してた。大吾は巻き込まれただけだから家に帰してやってくれ。そう言ってるぞ。」
将之はなんてデカイ奴なんだと思った。
俺は起きてからいままでずーっと海をどうやって殺してやろうか考えてた。
でも、将之は違った。
アイツは海の事はおろか、俺の事まで心配してくれてた。
最高にいい奴だ。
その後、取り調べは１週間続き、俺達は鑑別所に移送された。

鑑別所は大人で言ったら拘置所みたいなとこだ。
家裁からの判決待ちの約一ヶ月間入ってる。
鑑別所は精神的に辛い。
誰とも話できない。
朝は6時に起きて布団畳んだり、顔洗ってラジオ体操する。
そっから朝食なんだが、これがまた不味い。
山盛りご飯は麦7米3の黄金比。
おかずは魚が出ればまだいい、わけのわからないザーサイとキュウリのキュウちゃんしか出ない日もある。
味噌汁だけが友達。
そのあとは、運動と言うなのイジメと、一日二冊だけ貸してくれる本を読む。
日課はボールペンの先で色紙ちぎって書く貼絵。
ドラえもん書いたら、鑑別所の中に飾られて笑った。
風呂の時間は大変だった。
少年ヤクザみたいな奴が多くて背中が絵の博覧会。
親指は常に水面より上に出してなくちゃいけないからかなり間抜けな状態。
湯船の中で連絡先とか交換できないようにするためらしいけど、かなりシュールな光景だ。
土曜日と日曜日は特別な日だった。
朝から食パン一斤しかも出てくるマーガリンとジャムは学校給食サイズ。
全部食べないと責められるから、口の中パサパサになっても食った。

土日は午前中と午後に各1本ずつ映画が見られる。
自分のお金で頼んだカールのチーズ一袋とあんパンとオレンジジュース飲めるから幸せだった。
ただ映画の内容はたしかとなりのトトロとかグーニーズとかだったかな。

フランダースの犬が始まった時は別の意味で泣いた。
　たまに家裁から検事が取り調べ来るぐらいで、稀に親とかが面会来た。
約一ヶ月すぎると家裁で裁判になる。これで行き先決まるわけ。
俺と将之は、初犯だったから保護観察になった。
外に出て一番最初にしたことはタバコを吸う事。
こればかりはヤクザもガキも変わらないみたいだ。
その足で保護観察所（ちゃんとした名前忘れた）に行き、近所の保護司を紹介してもらう。俺の保護司は７０過ぎのおじいちゃんだった。
そっから1年2ヶ月の保護観察期間がスタートする。
月二回保護司に行かなきゃならない規則だったけど、保護司のじいちゃんがいい人だったからなんとかがんばれた。
学校では、友達はみんな海の事、無視してた。
逃げたのがみんなにバレたらしい。
「仲間を売る」って事だけは、絶対にやってはいけないんだ。
それだけは、今も昔も変わらない。
誰からも相手にされなくなった海に最初に話しかけたのはやっぱり将之だった。
俺は将之ほど優しくないから一回ボコボコにしてチャラにした。
拓ちゃんは怒ってたけど俺と将之が納得するならって事でまた海を仲間に入れた。
だがこの選択が間違いだったと思い知るのはまだ先の話なんだぜ。
とりあえず学校に戻った俺達には受験が待ってた。
拓ちゃんは頭悪すぎて入れるとこがないから、県内で1、2を争う海沿いのバカ高校に嘆願で入れた。
将之は拓ちゃんとは違うものの、やっぱり1、2を争う山の方のバカ高校に嘆願で入った。
海はそれなりの普通高校に進み、俺は拓ちゃんの学校の近くのやっぱりバカ高校に入った。

中学の卒業式はパトカーが来てた。
隣町の奴らもやっぱり喧嘩売りに来てた。
ＮＯ　ＦＵＴＵＲＥな奴らばかりだ。

狂った朝日

俺が中三の時に親が離婚した。
いつの間にか母ちゃんが出てった。
二人とも浮気してたらしい。
世に言う、W不倫ってヤツ。
俺が高二の時に突然、新しい母ちゃんがきた。
どっちにしても家に帰ってなかったから関係ないけど。
だけどこれでウチは安っぽい三流ドラマの気の毒な家庭の仲間入りした訳だ。
その分、好き勝手にできたから別にいいけどね。
さて、話を戻そう。
高校に行く前の春休みに俺達は正式に地元の暴走族に入った。
その頃はまだ、二コ上の先輩が頭やってて、他のチームとは仲良くやるってのがモットーの平穏なチームだった。
ようは、周りから舐められてたんだ。
どこのチームも、ウチの地元は縄張り関係なく、好きに流したりしてた。（暴走したりってことな）
完全に無法地帯みたいな状態だね。
誰も文句言わないんだものしょうがない。
で、俺達もやっぱり高校に入ると、自然とみんな違う道を進んでいった。
将之は高校でできた友達と遊んでばかりであんまり地元に帰ってこなくなった。
拓ちゃんも、暴走族より毎日学校終わったら他所の奴らと遊び、次第に地元から離れていった。
だからこの頃の俺は、助川秀幸と一緒に遊んでた。
助川秀幸。
あだ名は助さん。

この男は俺のその後の人生に大きく影響を与えた奴。
いい意味でも悪い意味でもな。
助さんは、俺達の頭で、まとめ役的な事してる奴だった。
コイツには中学の時、何度も喧嘩を挑んだけど、一度も勝てなかった。
自分で言うのもなんだけど、俺だって弱い方ではなかったのに毎回苦い思いさせられてた。
間違いなく、喧嘩は俺たちの年代の中で、最強。
で、基本的にはいい奴で、頭もキレる。
当時、反町隆史に似てるって言われて女にもモテるし、いい気になってた。
死ねばいいのに。
他にも、同じ高校に行った山本和哉って奴とか、色々出てくるんだけど、その辺は追々話してく事にするよ。
高校にあがるとやっぱり他の地元の奴らも集まってくるから当然喧嘩が絶えない。
ウチの高校も例外なく、腕自慢達の馬鹿の天下一武道会が始まる。
部室の裏や体育館なんかで、毎日誰かしらが喧嘩してたな。
ホント、馬鹿ばっか。
ちなみに俺達の中学は和哉ががんばってた。
俺は面倒だったからパス。
そもそも、高校生活より、族の方が大事だった。
和哉も、俺より喧嘩は弱かったけど、結構場数踏んでたからそこそこ強かった。
馬鹿共の天下一武道会もいよいよクライマックスって時、和哉がやられた。
しかも相手は柔道の有段者。
こりゃまともにやっても勝ち目はない。
でも、やられっぱなしじゃ終われない。
俺は、仇討ちにと、和哉をやった奴のいる教室に向かった。

ソイツは沢村って奴で、柔道の特待生で柔道だけでウチの高校に入った奴。
一目見て、「ああ、コイツだな」ってのがわかった。
授業中に乱入して、ポカーンとした顔してこっち見てる沢村に、問答無用で便所掃除用のデッキブラシを思い切り振り降ろした。
頭を押さえてうずくまる沢村に、もう一発、デッキブラシ叩き込んでやった。
授業中だった教室はパニック状態。
ほとんどのびてる沢村にトドメのサッカーボールキック入れた瞬間、先生達に取り押さえられた。
そのまま職員室連れてかれて、親呼び出しのはずだったんだけど、両親共、まさかのどっちも学校に来るのを拒否。
気の毒な子供扱いされながら、とりあえず家に帰る様に言われた。
今考えると、本当に可哀想な子だよな。
その夜、学校から連絡があって、俺は一ヶ月の謹慎処分になった。
（謹慎ってのは、学校には行けるけど、他の奴らから隔離されて一人で自習みたいな事をやらされ、他の生徒が帰った後に、無意味な掃除なんかやらされたり反省文書かされたり本当に退屈な時間だ）
そして一ヶ月の謹慎があけると、今度は先輩に呼び出された。
一コ上の井上君。
井上君は、無駄に喧嘩が強く、そんでもって従兄弟が隣町の暴走族のＯＢで、二コ上の先輩達も迂濶に触れない様な爆弾。
一体俺達はどーなるんだろうと思ってたら、彼はどうやら俺達の事を気に入ったらしい。
とりあえず何かあったら俺のとこに来いと言われた。
この事で俺達のグループは、一年をまとめる事に成功した。
高校に入って2日で騒ぎを起こした俺は、クラスの奴の顔なんて全然わからなかった。
和哉とは科が違うし、いきなり騒ぎ起こす様な奴と気軽に話かけてくる様な奇特な奴はなかなかいない。

俺はクラスの男子の中ではちょっと浮いた存在になった。
だが女は俺の予想の斜め上をいき、どうやら奴らはいきなり謹慎になるよーなおバカなクラスメイトに興味深々の様だ。
自慢じゃないが、おかげで俺の高校時代の友達は圧倒的に女の子が多くなった。
里美もその中の一人だった。
村上里美は家庭の事情ってヤツで遠くからこっちに姉ちゃんと引越してきたちょっとかわいそうな奴。
人見知りしない性格だったから、俺みたいな奴にも普通に話かけてきた。
顔は、結構かわいかったし、細くて華奢で、どっちかって言うとモテる感じ。
胸は無いけどな。
ってかコイツはかなり変わった趣味の持ち主で、里美の中で俺の評価は1週間後には、クラスメイトから運命の人に格上げされてた。
俺が里美の一番最初の男になった。
そして、この頃から俺は、どんどん暴走族にのめり込んでいった。
ウチの地元は回りに7つも暴走族があると言う、かなり劣悪な環境だった。
ウチのチームは実権握ってた二コ上の穏健派の先輩達のおかげで、比較的回りのチームとは仲良くやってた。（逆に言えば、どこのチームにもいい顔してる八方美人って事）
単車貸してくれと言われて、そのまま返ってこなかったり、訳のわからない金を集めさせられたり相変わらずの無法地帯。
ある時、助さんが近所のマックに俺達を集めた。
下剋上を起こすために。
「このまま先輩達の言いなりで飼い殺されるか、片っ端からぶっ壊して俺達の天下にするか。」
みんな不満がたまってもう限界だった。
答えは最初から決まってた。

助さんはまず、ケツモチのヤクザに話を持っていった。
ケツモチってのは、読んで字の如く、他の地域の連中や、面倒な連中と揉めた時に、俺たちの後押しをしたり、尻拭いをしてくれる。
その代わり、毎月いくらって上納金があり、早い話が俺達の用心棒って事（俺達が暴力団の末端組織なのかもしれないけどな）
やはりヤクザも揉め事が多い方が儲かる。
快く俺達の事を認めてくれた。
ヤクザを抑えれば後は簡単だ。
人数使って一人一人潰していけばいい。
助さんがヤクザに話を通したりしてる頃、俺と和哉は雅之って奴とウチのチームのＯＢ達の住所を調べてた。
現役でやってた先輩達だけでなく、後から出てこれない様にＯＢまで潰す事になったからだ。
この計画の絵を描いたのが、根本雅之。
雅之はとにかく頭がキレて、そしてチーム内での人望も厚い。
そして、女にモテる。
コイツも死ねばいいのに。
おっと、また脱線しそうだから話を戻そう。
もちろんＯＢには拓ちゃんの兄ちゃんの悟君も含まれてる。
チーム全体をさらに細かく何チームかに分けて、各チームごとに頭をあげて、頭が仕切ってＯＢや現役の先輩達を一人ずつ潰していく。
俺も頭の一人になった。
俺の受け持ちに悟君が入っていた。
悟君を襲うって事は、必然的に拓ちゃんもやらなきゃならない。
だけど、拓ちゃんや悟君に良くしてもらったのは、きっと俺が一番だ。
今日までの俺があるのは、きっと二人のおかげだろう。
なんでこんな事になっちまったんだろうと、足りない頭で精一杯考えたけど、結局答えは出なかった。
悟君は他の奴らに任せて、俺は拓ちゃんを潰しに一人で向かった。

拓ちゃんはいつも、近所の焼鳥屋にいた。
今日もきっといるはず。
いないで欲しいって気持ちと、いて欲しいって気持ちが胸の中で入り混じる。
不安をかき消すように、単車をとばした。
焼鳥屋に着くと、外に単車が停めてある。
拓ちゃんだ。
拓ちゃんと将之が飲んでた。
「大吾、こっち来いよ！」
拓ちゃんが手を振る。
久しぶりに会ったけどこいつらはやっぱり変わってなかった。
すごくいい奴だ。
拓ちゃんも将之も最近の俺達の動きをわかってた。
拓ちゃんは俺に言った。
「俺の事、潰しにきたんだろ。」
俺が答えに戸惑うと、
「ちょっと飲んでからにしようぜ。逃げも隠れもしないから。」
と笑いながら言った。
酒の味は全然わからなかったけどとにかく俺達は話したんだ。
いままでの事や、高校の事。
こんなに笑ったのは久しぶりってぐらいに。
でも楽しい時間は続かない。
「そろそろ行くか。」
と悲しそうに拓ちゃんが言った。
場所は焼鳥屋近くの神社。
「お前が大切にしなきゃならないのは、昔の仲間じゃなくて今の仲間だ。そう思うなら手なんか抜くな。ちゃんと俺を潰せ。あの頃からどんだけ変わったか見せてみろ。」
拓ちゃんは酔っ払ってたけど、いままで聞いたどんなありがたい話なんかよりずっと胸に刺さった。

涙が出そうだ。
将之が笑った。
「全部終わったらまた飲みに行こう。こんどはお前のおごりな。」
倒れてる二人を置いて焼鳥屋まで歩いた。
泣かないように上を見ながら。
焼鳥屋には和哉と雅之が待ってた。
もうすぐ夜が明ける。
空は俺の気持ちとは裏腹に、雲ひとつなかった。
狂った朝日が俺達を照らした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8808x/

Sea Side Jet City

2011年11月9日03時09分発行